【27】

氏　名(国　籍)	エメリタ・フロレス・アレバロ（フィリピン）
学位の種類	博　　士（教育学）
学位記番号	博　甲　第　1,778　号
学位授与年月日	平成10年 3 月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心身障害学研究科
学位論文題目	A Study on the Use of Simultaneous Communication in Schools for the Deaf in the Philippines （フィリピンの聾学校における同時法の使用に関する研究）

主　査	筑波大学教授	教育学博士	草　薙　進　郎
副　査	筑波大学教授	学術博士	斎　藤　佐　和
副　査	筑波大学助教授	医学博士	吉　岡　博　英
副　査	筑波大学助教授		塚　田　泰　彦

論文の内容の要旨

1．問題の所在

聴覚障害児のコミュニケーション能力は，言語能力の不足という問題を抱えており，教師や親による言語モデルのインプットは，かれらの言語獲得に重要な役割を果たす。

1960年代末のアメリカにおけるトータル・コミュニケーションの台頭以来，同時コミュニケーションが世界的に普及してきた。手話とスピーチの同時使用の実際については，アメリカを中心にいくつかの研究があるが，その実際について総合的に研究したものはみあたらない。また，フィリピンにおいては，本研究が最初であり，フィリピンの聴覚障害児教育にとって意義のある研究である。

2．研究の目的

本研究は，二つのフィリピンの聾学校のコミュニケーション様式の実態と，教師，親，生徒の同時コミュニケーションの実際を解明することを目的とする。

3．調査研究

二つのフィリピンの聾学校のコミュニケーション様式の実態を，明らかにすることを目的とする。

1）調査1　フィリピン聾学校(PSD)についての調査

フィリピン聾学校の教師51名，親76名，生徒126名を対象に，質問紙調査を実施した。

その結果，①教師はSEE1，ASLなど種々の手話方式を使用している。②親は口話，手話，指文字などを使用している。③生徒は場面，相手によって種々の様式を使用している。④教師の手話能力は殆どが基礎レベルである，ことなどを明らかにした。

2）調査Ⅱ　フィリピン聾協会学校(PAD)についての調査

フィリピン聾協会学校(PAD)の教師8名，親31名，生徒19名を対象に，質問紙調査を実施した。その結果，①教師は，手話方式を使用しているが，ASLを最も使用している。②親，生徒は，フィリピン聾学校と同様な傾向がみられた。

4．実験研究

教師，生徒，親の同時コミュニケーションの実際を解明することを目的とする。

1）実験研究I-1 PSD中等部アカデミック教師の同時コミュニケーション

［対象］英語ⅠⅡⅢⅣのクラスおよび数学ⅠⅣのクラスの教師6名を対象とする。

［方法］10分間の授業のVTRテープを書記化し，スピーチと手話の一致度について，メッセージ・レベル(MLC)と言語構造レベル(SLC)から分析する。

［結果］①メッセージ・レベルでスピーチと手話の一致度は，平均54％であった。言語構造レベルでは平均85％の一致がみられた。②名詞，動詞などの内容語は，スピーチと手話の併用か，口話と手話のどちらかで表された。

2）実験研究Ⅰ-2 PAD中等部アカデミック教師の同時コミュニケーション

［対象］4名英語ⅠとⅣおよび社会ⅠとⅣ

［結果］①メッセージ・レベルでは，スピーチと手話の一致度は，平均72％であった。言語構造レベルでは，平均82.1％の一致がみられた。② PADのアカデミック教師の方が，同時コミュニケーションの使用の一致度がPSDのアカデミック教師より高かった。

3）実験研究Ⅱ　フィリピン聾学校(PSD)の職業科教師の実際

［対象］4名 美容，食物，洋裁，電気

［結果］① メッセージ・レベルでスピーチと手話の一致度は，平均50％であった。言語構造レベルでは平均80％の一致がみられた。②アカデミック教師に比べて，指文字，指さし，マイムが多く見られた。③職業科と教科の教師の違いは，教科の性質によるものと考えられる。

4）実験研究Ⅲ PSD初等部アカデミック教師の同時ケミュニケーション

［対象］6名　英語，社会，算数，理科

［結果］①初等部のアカデミック教師は，メッセージ・レベルの一致度は平均71％で，言語レベルでは，91.8％の一致がみられた。②メッセージ・レベルの結果は，PADの中等部のアカデミック教師と同程度であったが，言語構造レベルでは，約9％高かった。

5）実験研究Ⅳ PSDの親の同時コミュニケーション

［対象］3名PSDの中等部の生徒の親

［方法］子供との日常場面での両親の会話について，10～30分VTRに録画し，同時コミュニケーションの実際について分析する。

［結果］①親のスピーチと手話の一致度は，平均7.9％ときわめて低かった。②全発話のうちスピーチのみが，平均88.3％と高く，指文字は0.5％，ジェスチァは0.4％ときわめて低かった。③親は，調査研究では手指様式を望んでいたが，実際はスピーチが優位で，親子のコミュニケーション成立の困難性が示唆された。

6）実験研究Ⅴ聾学校（PSDおよびPAD）中等部生徒の同時コミュニケーション

［対象］PSD中等部Ⅰ～Ⅳの生徒4名およびPAD中等部Ⅰ～Ⅳの生徒2名を対象とする。

［方法］生徒が，「自分の家族，学校生活，将来」について話しているところを，10～15分録画し，同時コミュニケーションについて分析する。

［結果］① PSDの生徒は，手話を優位に用いていた。手話の方式は，SEE2が平均36.1％，PSE(ピジン)が22.9％，ASLが41％であった。②同じくスピーチと手話の一致度は，平均60.3％であった。③ PADの生徒は，スピーチと手話をかなり用いていた。手話の方式は，SEE2が平均13.5％，PSE(ピジン)が23％，ASLが63.5％であった。④スピーチと手話の一致度は，平均76.1％でPSDの生徒より高かった。PADの生徒は，PSDの生徒に比べて，一致度は高く，ASLが最も高かった。⑤全発話に対して，ASLは40％～65％用いられており，一方SEE2は10～36％にすぎない。この結果から，子供の取り巻く教師，親などが正しい，完全な言語モデルの提供を心掛け，生徒の手話方式の能力を高める努力が必要であると考えられる。

5．考察

アカデミック教師に比べて，職業科教師はメッセージ・レベルでのスピーチと手話の一致度は，50～71％と低

かった。同じく，親の一致度は，教師に比べてさらに低かった。この点を考えると，生徒はメッセージの完全な受容に比べて，30～50％も低いメッセージを受容していることになる。このことは，生徒が単純な，偏った文を受容していることになり，本研究データにみる生徒の非文法的，不完全な文の表現に影響していると考えられる。また，本研究でみられた生徒の手話言語(ASL)表現の特徴に表われていると言える。

6．結論と今後の課題

本研究の結果は，教師，親とも同時コミュニケーション能力を改善する必要を示している。コミュニケーション様式の使用能力については，いかにスピーチと手話を一貫して同期させるかとともに，さらなる手話能力の訓練を受けることが必要である。つまり手話能力を改善できれば，同時コミュニケーション能力を向上させることになるであろう。周囲の教師，親などが子どもに十分な，正しい言語モデルを提供する責任がある。

本研究の結果，教師，親，聴覚障害児の同時コミュニケーションの使用状況が，様々な点から明らかになったが，今後さらに被験者の数を増やし，研究を深めていくことが必要である。

審査の結果の要旨

聴覚障害児がスピーチを受容するとき，口話と手指を併用する同時コミュニケーションの方法が有効である。コミュニケーション場面でのその実際については，アメリカで若干の研究があるが，フィリピンでは皆無である。本研究は，①教師，親，生徒のコミュニケーションの実態についての調査研究と，②教師，親，生徒を対象に同時コミュニケーションの実際を総合的に研究しており，得られた知見は研究上，教育上貴重なものとして高く評価できる。とくに，初等部と中等部の教師の実際，およびアカデミックと職業科の教師の実際から得られた知見は，今後のコミュニケーション方法の改善にとって重要である。本研究では対象者数が限られているので，今後さらに人数を増やすとともに，分析方法の客観性を高めることによって，さらなる究明が期待される。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。